

## キャンパス問題について

祖父江 義 明 (天文学教室)

当理学部は質的・量的に多様で総合的な内容をようしている。これは大きな特質で教育・研究の両面に重要な要素となっている。一方多岐にわたる研究分野の一部で、大型、特殊な装置をかかえ、現在のキャンパスでは身動きがとれなくなりつつあるのも現実である。他に土地をもとめて移転という単純な発想もでてこよう。

典型的な例を天文学にみることができる。希薄な大気をもとめて高山あるいはスペースへ、また  $\lambda/D$  (波長/口径) という回折限界のゆえに広大な平地を求めて砂漠へ(電波の場合は巨大になる)、そして最近では地球サイズの  $D$  も現われて

(大陸間干渉計)すでに身動きできない状態である。さらに広大な地面(?)と真空を求めて観測サイトは早晚スペースに移ってゆくことは必然であろう。振動や雑音、重力をきらい、あるいは真空を必要とするような物理学のある分野でも似た状況にあらう。これらの装置のために郊外に適当な土地を確保することは重要である。

では、実験物理学者や天文学者は山奥へあるいはスペースへ移住しなければならないか? おそらく否である。研究情報が多様化し、変化の速度が増せば増すほど、研究者間の情報交換、共同研究、国際協力が重要となってくる。仙人ぐらして

はやっていけないのである。そこで観測実験サイトは遠隔地やスペースで、そして研究・基礎実験・解析は情報と人員が集約した地の理を求めて行うことになる。ハイテクに支えられた高度、大量の情報通信も活用される。わが天文学教室でもサブミリ波や赤外の先進的な装置を建設する計画もっている。これをどこに置くかは問題である。おそらく郊外の高地におくことになるろう。しかし、特に学生の教育面から考えて、教室ごと、あるいはその一部の移転という発想はない。

ふりかえって本郷の立地条件などを考えてみよう。総合大学として満点とはいかないまでも、かなりの規模と風格、そしてなによりも学生や研究者相互の交流に欠かせない立地の良さをかねそなえている。国際化社会にあって成田空港から1時間という立地も大切だ。新幹線などによって国内研究者との往来も至便である。国の機関、省庁も至近である。そして勿論、総合大学として学問の府をなし、構成員が互にその恩恵を享受できることは本質的である。また、地域あるいは社会に開いた大学を目指そうとすれば、地の理と総合性はますます重要になってこよう。最後に、日本とい

う国土において、東京、しかも都心のもつ特殊な意味と重要性を慎重に考えてみる必要もあろう。さらに文化、経済両面で東京、とくに都心が国際的に重要度を増している客観情勢も、今後の大学のあり方に無関係とは思えない。

さて理学部キャンパス・建物の現状をかえりみると、これはやはりなんとかしなくてはならない。本郷に理学部を運営するとすれば再開発は不可欠であろう。再開発には遺跡問題がつきものだ。しかし、遺跡は日本中どこへいっても出てくるだろう。この問題には、例えば外注方式などが参考になる。建物を集約、高層化することで、スペースの確保とコミュニケーションの大巾な改善が望めよう。一方、大型、精密な実験設備をおくためにアクセスの良い土地を確保することも必要である。これら諸々の実験・観測施設を太い通信パイプで本郷と連絡することは容易である。再開発にはもちろん山ほど解決すべき問題があろう。しかしこれらはほとんどすべて技術的な問題であって、よりよく快適な研究・教育環境を実現するためと思えば、悩みというよりもむしろ楽しみながら解決してゆくことができる問題ではなからうか。